



ちょっとそこまで～お散歩日和（植物編）～



ヒガンバナ



お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうには、お城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていた。と、村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴ってきました。そうしきの出る合図です。



新見南吉「ごんぎつね」の最も印象的なシーンです。この物語は、1980年以降、小学4年生の国語教科書全てに掲載されている「定番」教材です。

それまでの、単に悪戯好きだけで他人の痛みに関心なく無頓着だったごんが、この場面を境に、兵十に対する深い悔恨の情に苛まれ始めます。これ以降、二人の感情のすれ違いから悲劇への道を突き進むことになる、そのターニングポイントということになります。いずれにしても、兵十の悲しみの深さと、ごんの悔悟の情の深まりをヒガンバナに託して見事に描いています。

確かに、このヒガンバナを見ると、どうも私たちは心に何かしらの不安定な一面が過るような気がします。その花言葉も「悲しい思い出」であり、ネガティブな気分や不安を想起させることが多いようです。

とともに、私たちが驚かされるのは、まるで長い間忘れていたものを思い出させるかのように、秋の彼岸になると決まって開花した姿を現す律義さでしょう。それが祖先に対する敬愛の念の欠如を指摘されるようで、心の痛みとなって蘇ってくるのではないかと推察します。



藤棚下のヒガンバナ

それが覆ってきたのは、明らかに欧米の影響でしょう。墓地や彼岸との関連のない文化においては、その姿に孤高と貴賓を素直に感じ取り、マジックリリーやダイヤモンドリリー、スパイダーリリーと呼ばれて珍重され、多くの園芸品種が開発されてきました。それが、リコリスやネリネとして広く認知されているだけでなく野生化もしているほどです。



リコリス



ネリネ

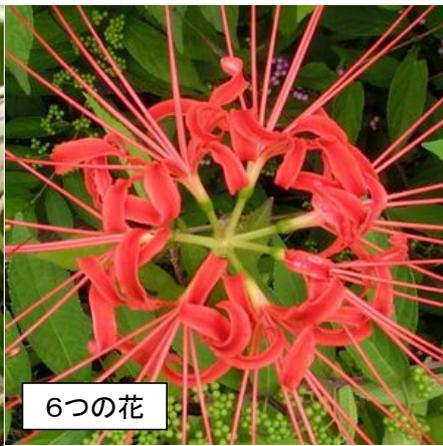
その心理効果は大きいようで、現在では、あちこちにヒガンバナの名所ができています。特に、高麗の巾着田は有名で100万本といわれる大群落は圧巻の景色です。「ごんぎつね」の舞台となった愛知県半田市は、新見南吉ゆかりの地として記念館があり、

その周辺の大群落もまた見応え十分です。

この花、ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草で、草丈30～70cmほどの花茎の上に花径7cmくらいの真っ赤な花が5～7個咲きます。花弁は6枚で細長く、強くそり返り、おしべは6本、めしべは1本で、ともに長く飛び出ています。近くでよく見ると、なかなか個性的で派手な花のつくりと言えるでしょう。



6つのつぼみ



6つの花



6本のおしべ

さらにユニークなのは、その生態です。いきなり茎が伸びて花だけを咲かせ、わずか1週間ほどでその茎は朽ちていき、寿命が尽きるかのように枯れてしまいます。しかし、実際の一生はここからがスタートとなります。花を終え、しばらくするとニラのような細長い葉が伸びてきます。結局、翌春までこの状態で光合成が進み、地中の球根に栄養が溜め込まれ、分球して増えていくということになります。そして、初夏に葉を枯らして眠りにつくというサイクルです。つまり、他の植物のスキマをついた生き残り戦略を実践しているということなのです。

ところで、ヒガンバナは花が咲いても実がならない不稔性植物であることは有名です。原産地の中国は種子が実るそうですから、どうして日本だけがこんなことになったのでしょうか。興味は尽きません。いずれにしても、日本のヒガンバナは球根（鱗茎）でのみ増えることができる植物ということになります。

ということで、通常なら種子をもたない植物が日本各地にその自生地を広げられるはずがありません。では、どうやって広げていったのか、想像してみるのには、とても楽しい作業のような気がします。

一般的には、

- ・球根の毒でネズミやモグラなどの小動物の侵入を避けるため、人間が墓地や田畑の畦に積極的に植えた。
- ・水にさらして毒を抜くと食料になるため、飢饉などに備えて非常食として植えられて各地に広まった。
- ・雨で水かさが増え、球根が洗われて、他へ運ばれていった。
- ・分球して球根が増えた場合、地表に球根がせり上がり、露出して別の場所へ転がっていく。
- ・イヌヤカラスがくわえていったり、何かにくっついて他へ移った。

とされていますが、あくまでも想像の域を出ません。

ただ、最近気になる現象として、赤い花に代わってシロバナヒガンバナがとても目立つようになりました。これはもともとは九州地方に多い種ですので、地球温暖化の影響が大きいのではないかとされています。実際、当団地の赤いヒガンバナはほとんど姿を消し、シロバナの増殖が著しいように思います。もちろん、どなたかがせっせと植栽されているのでしたら、全く私の見間違いということになります。

最後に一言触れておきますと、同じように不稔性でありながら日本中に広がって事例として、ソメイヨシノがあります。全てがクローンであるために「開花前線」が成立するのです。ヒガンバナが同時期に一斉に開花する理由も理解できるというものです。

(終)



9・10号棟の間で



1・7号棟の間で